

インマヌエルの神

土筆 文香

(島田裕子)

一、試練の前に

私の家族は両親と祖母と妹の五人でした。家族にも親戚にもクリスマスチャンはいません。一八歳でミッシヨンスクールに入るまでは、キリスト教に触れたことが一度もないと思っ
ていました。

ところが、小学校低学年の時、一度だけ友人に誘われて教会へ行ったことがありました。どこの教会かわかりません。その日は、イースターだったらしく、ゆで卵をもらって帰ってきました。どんなお話を聞いたのか、どんな人たちがいたのか全く覚えていませんが、楽しかった思いだけが残りました。

小学五年生のとき、友人の家で英語教室が開かれることになり、二年間、毎週土曜日に通っていました。

若い男の先生が教えてくれました。クリスマス会するとき、先生が『『もろびとこぞりて』を英語で歌おう』と言いました。私たちは皆首をかしげました。「もろびとこぞりて」の日本語の歌詞も知らなかったのです。

それで先生は、『『もろびとこぞりて』を日本語でまず歌おう』と言って教えてくれました。その先生がクリスマスチャンだったことをずっと後になつて聞きました。

歌詞の意味やクリスマスの意味などは聞いた覚えがありません。もしかして、英語は教えても、宗教的なことは話さないようにと友人の父親からくぎをさされていたのかもしれませんが。私は知らずにクリスマスチャンと出会っていたのでした。

その後、武蔵野市の公立の中学に入學しました。その学校には一学期しか在籍しませんでした。強烈に心に刻みつけられることが二度ありました。

一度目は理科の時間に理科室で「米子」という八ミリ映画を観たことです。鉄道自殺をこころみて、手の指やひざから下を失い、その後クリスマスチャンになった田原米子さんのドキュメントでした。障がいがあり、不自由なことがたくさんある中で、工夫を凝らして輝いて生きている米子さんの姿に心打たれました。

二度目は、視聴覚室で「汚れなき悪戯」を観ました。キリストの像が動くところに激しく心揺さぶられ、家に帰って祖母にストーリーを最初から最後まで話したことを覚えていません。無口だった私が三〇分ぐらい話し続けたのは、よほどインパクトが大きかったからでしょう。黙って聞いてくれた祖母に感謝しています。

今でも不思議に思うのは、なぜ公立の中学で宗教的な映画を見せたのかということ。クリスマスチャンの先生がいたのかもしれない。神様は、この後訪れる試練に備えて傷つきやすい私に軟膏を塗ってくださったのです。

二、ひとりぼっち

父親が大阪に転勤することになり、中学一年の夏休みに東京の学校から神戸の学校に転校しました。これまで、何をすることも消極的で「おとなしいね」と言われていたので、新しい学校では明るく積極的にふるまおうと決心しました。ところが、担任の先生から紹介されると、いきなり「東京から来たんやて。生意気やな」と声が聞こえました。一言話すごとに関西弁と発音が違うので笑われました。

それからいじめが始まりました。「それ、東京で買ったんやろ」と言って筆箱を捨てられ、座ろうとしたら椅子を後ろにひかれ、口を開けば話し方があかんと言われました。それで、もともと無口だった私がなおさら無口になりました。中には親切にしてくれる生徒もいて、友達になりました。

中学二年でクラス替えがあり（当時九クラスもありました）、女子の中で知っている顔がひとりもないことに気づきました。自分から話しかけることができず、一年間友達ができませんでした。

孤独になったせいかな色々なことを考えました。家には仏壇と神棚があったのですが、神様と仏様どっちが偉いの？ 罰が当たるって本当？ 良いことをした人が幸せになつて、

悪いことをした人は不幸になるって、本当？ たくさんの疑問を両親にぶつけましたが、「そんなことを考える暇があったら勉強しなさい」と叱られてしまいました。

また、むなしさも感じていました。時間をかけ一生懸命描いた絵を壁に貼っていたら、日に焼けて変色し、一部がボロボロになっていました。それを見て、人間が作ったものはどんな物でも古くなってしまふのだ。人間も、どんなに長生きしたっていずれは死んでしまふんだ。一生懸命努力しても何も残らない。勉強がなんの役に立つというのだろうか……と考え、死にたいと思うようになりました。

そのころ、喘息が悪化してよく学校を休んでいました。一週間欠席して久しぶりに学校へ行っても、誰も声をかけてくません。自分は、いてもいなくてもいい存在なのだと思います。喘息の苦しさをがまんしてまで生きる価値があるだろうか。ひとりぼっちで、朝、学校へ行つてから誰とも一言も話さず帰ることの多かった日々。こんな日が続くと続くと、死んだ方がましだと思いました。自殺をしなかったのは、祖母を悲しませたくなかったからです。

自分の存在価値がわからず、何のために生まれてきたかわからずに過ごした日々でした。自分はダメな人間だという大きな劣等感を抱きながら悶々としていた中二の一年間は、十年にも感じられる長い時間でした。

三、存在が認められて

中学生のころ、家で毎日中学生新聞をとっていました。中学生新聞のコラムを読んだとき、心打たれたので、その記事を書いた先生に手紙を出してみました。別の中学の先生だったのでお返事はこないと思っていたのですが、一週間後にお返事が届きました。それは、温かく励ましてくださるような内容の手紙で、手紙を読んで声を上げて泣いてしまいました。

会ったこともない人に手紙を書かなければならないほど、心に切羽詰まった思いがあったのです。その後も悩みや考えていることを手紙に書くと、丁寧にお返事をいただき、A先生とは中学二年から高校三年まで文通が続きました。

今から思うと、A先生にはクラスの生徒たちがいて忙しい日々を送っていたことでしょう。それなのに、自分の担任ではない中学生に手紙を書き続けてくださいました。

「あなたは文章がうまいです」「この本を読んで感想を書いてください。あなたの感想文が読みたいです」A先生は手紙で励ましてくださいました。先生のおかげで生きる意欲が与えられました。文章を書くことが好きになり、本をよく読むようになりました。

小説を書き始めたのはそのころです。作文は苦手だったのですが、空想したことを文章

にすると、書いているうちに勝手に物語が動きだし、どんどん書けるのです。原稿用紙一三六枚の小説を書いたとき、少し自信ができました。わたしは何をやってもだめな人間だけど、一三六枚もの小説を書けるのはこのクラスで自分だけだと思い、劣等感から解放され、代わりに優越感を抱くようになりました。

長い中二がやっと終わり、中学三年になったとき、クラスに二人の友達ができました。中三のクラスは、あだ名で呼び合っていて、私にもあだ名ができました。グリムです。クラスの中で自分の存在が認められたように思いました。

高校生になるころには喘息の発作を起こすことがほとんどなくなっていました。資格を取って自立したいと思い、幼稚園教諭の資格が取れる学校を受験しました。ところが結果は補欠の十番。ぎりぎり繰り上げ合格になりました。

入学してからその学校がキリスト教の学校だと知りました。教科書と共に聖書を買うようにいわれました。聖書を手にした最初の時でした。

学校では毎日礼拝がありました。夏休みには教会へ行つて週報をもらつてくることという宿題が出て、しぶしぶ行きました。讚美歌をうたつたとき、清々しい気持ちになりましたが、続けて行くことはありませんでした。

四、幼稚園に勤めて

人形劇に夢中になり、楽しく充実した学生時代はあつという間に過ぎ去り、幼稚園に就職することになりました。当時神戸にはキリスト教の幼稚園が多かったのですが、キリスト教でない幼稚園を希望しました。信じてないのに子どもたちの前でお祈りはできないと思つたからです。

勤めた私立幼稚園は、大変厳しい職場でした。その幼稚園に勤められれば、ほかのどんな幼稚園にも勤められるといわれていた園だと後から知りました。

短大のときは勉強も部活も頑張つて、努力こそ尊いことだと思つていました。でも、学校の成績が良くても子どもたちの前では何にもなりません。マニュアル通りにしようとしてもうまくいきません。自分の無力さに愕然としました。また、人間関係でつまずきました。教師がお互いに足を引っ張り合い、人間関係がぎすぎすしてしまいました。

園からの帰り道では、同僚と愚痴や悪口を言っていました。また、家では母との関係が悪くなっていました。母は仕事のこと、友人関係のことなど細かいことを詮索します。それがいやで、なるたけ会話の時間を持たないようにしていました。同僚と別れた後もすぐには家に帰らず、本屋で立ち読みをして時間をつぶしました。

その後、ひとりで食堂に入って夕食をとりました。家では母が夕飯を用意して待っているのに、家で食べたくなかったのです。外で食べながら急にみじめになって、どうしてこんなことをしているのだろうかと思いました。

子どもたちに読み聞かせをする話の本を探していたとき、三浦綾子の「あきつての風」という本が目にとまりました。壺井栄の「あしたの風」という話が好きだったので、この本も童話だと勘違いして買いました。「あきつての風」は若い人向きのエッセイでした。共感することが多く、うなずきながら読みました。次に小説の「積み木の箱」を読んだとき、ハンマーで頭をたたかれた気持ちになりました。

教師である主人公の悠二は、正しいと思つて一郎を指導しました。でも、それは一郎の心を傷つけるものでした。「真に自分を支えるものが、自分自身のなかにはひとつもないことに気づいた。(略)この弱い自分を導いてくれる確個とした真の教師が欲しい。初めて悠二はそう思った」この箇所を読んで、私は間違つていたと気づきました。

自分は悪口を言っていたけれど、自分自身はどうなのか。母の存在を疎ましく思い、母を避けていたけれど、私の冷たい態度が母を傷つけていたのではないかと、自分の悪いところに次々気づき、どうしたらよいかわかりませんでした。このままでは自分がダメになると思いました。

五、教会に導かれて

自分の悪いところに気づいてから日ごとに苦しくなり、このままではいけない。教会に行かなくてはならないという思いが募ってきました。なぜ教会なのか、そのときはわかりませんでした。無性に賛美歌をうたいたくなりました。学生時代、宿題でしぶしぶ教会へ行ったときうたった讚美歌が心に残っていたからかもしれません。

でも、その教会には行きませんでした。短大の先生がいらっしやったからです。知っている人が誰もいない教会へ行きかけたのです。

電話帳で調べて、ひと駅ほど先のプロテスタントの教会へ行きました。雨の降る六月のことです。緊張しましたが、思い切つて中に入ると、温かく迎えていただきました。日曜ごとに通ううち、ぎすぎすした人間関係の中で傷つき、疲れていた心が癒されるようでした。

夏休みに一泊二日で行われた六甲山での修養会にも参加しました。参加者はわたし以外皆クリスチャンでした。わたしのことを『求道者』と言われてとまどいました。クリスチャンとわたしとの間に大きな隔たりがあるように感じました。

教会の人たちは、みんな明るく輝いていました。私もこの人たちのようになりたいと願

いました。

その年の一二月に牧師先生から「クリスマスに洗礼を受けませんか」と言われました。「わたし、受けられるんですか？」驚いて尋ねると、先生は黙ってうなずかれました。

『洗礼を受けたら、イエス様の十字架によって、罪を赦していただける。新しく生まれ変われる』

そのとき知っていたのは、このふたつだけでした。自分の心が醜いことに気づいていたので、洗礼を受けて変わりたいと心から思いました。

母に話すと、反対されました。結婚できなくなるというのが大きな理由でした。そういう時代だったのです。でも、親に指図されるのもういやだと思いました。

「自分のことだから。自分で決めたから、洗礼受けるよ」と、宣言すると、母はあっさりと許してくれました。「受けてもいいけれど、お父さんには内緒にして」と、約束させられました。

洗礼のための学びもなく、証しをすることもなく、教会に通い始めて半年後、父親に内緒で洗礼を受けました。二二歳の時でした。

六、誤解

洗礼を受けて喜んだのは東の間のことでした。家では相変わらずがままで、自分の思い通りにならないと癩癩を起こしていました。以前より自分が悪い人間になったように思い、苦しみました。また、すっかり聖書を読んでなかったので、大きな誤解をしていました。洗礼のとき、今までの自分の罪は赦されるのですが、洗礼を受けた後に犯した罪は赦されないのだと思いこんでしまったのです。せっかくクリスチャンになったのに罪ばかり犯してしまう自分にあきれました。神様は、こんなわたしをとっくに見離したのだろうかと思ってしまうました。

洗礼を受けて二年後、父親の転勤で東京に戻るようになりました。心身共に疲れていたのも仕事もやめ、私も家族と一緒に東京へ帰りました。

その後結婚して埼玉に住み、ふたりの子どもが与えられましたが、心の中は虚しさでいっぱいでした。出産後、治っていたと思つた喘息が再び出てきてしまいました。それが年ごとにひどくなってくるので、不安と恐れがわき上がってきました。

教会へ行きたいと思つたとき、駅の近くに教会が新しくできました。夫の許可を得て、久しぶりに教会に行きました。なかなか中に入れなくて、自転車で教会のまわりをまわっ

ていると、牧師先生に声をかけられました。

小さな礼拝堂に入ると、前の方に座るようすすめられましたが、わたしはいちばん後ろの席にすわりました。洗礼を受けたのに教会を離れてしまった者なので、前に座る資格などないと思い、ずっとうなだれてメッセージを聞いていました。

後ろにイエス様が立っていて、私の肩をつかんで「よく来たね。おまえは、もう赦されているのだよ」と言ってくれたように感じ、涙が止まらなくなりました。

それから毎週礼拝に出て、婦人会で聖書の学びをしました。婦人会では、キリスト教入門の学びをしていました。その学びを通して、私が神様のこと、イエス様のことをずいぶん誤解していたのだと知らされました。

「今やキリスト・イエスにある者が罪に定められることは決してありません。(ローマ八章一節)」

と聖書に書かれています。私は、すでに赦されていたのです。イエス様は、洗礼を受けた後に犯した罪のためにも十字架にかかってくださったのです。

子どものころからずっと求めていたものによりやく出会えました。すばらしい神様に出会って、虚しさから解放されました。心の中にもしびがとまったように明るくなりました。

七、乳がんになって

三四歳のとき、夫の転勤で茨城県に引っ越し、土浦めぐみ教会へ通うようになりました。日曜日は子どもたちを自転車の前と後ろに乗せ、三〇分かけて教会へ通いました。私は教会学校の奉仕をし、家庭集会や子ども家庭集会を開き、充実した教会生活をおくっていました。

子どもたちも大学生、高校生になって自分の時間が持てるようになったころ、乳がんがみつかりました。初期だったので、手術したら治るのだろうと簡単に考えていました。術後、医師からリンパ転移があると言われました。ネットで調べると、リンパ転移がある人は一〇年生存確率四％と書かれていました。(この情報は確かではありません)

ショックでした。一〇年以内に死んでしまうのだと思うと胸が張り裂けそうになりました。死ぬことはちっとも怖くありません。イエス様と一緒にだからです。でも、まだ地上でやり残したことがあります。子どもたちがせめて成人するまでは生かしてくださいと泣きながら訴えました。

悲しみの中で、どんなに生きたいと望んでも、そのために全財産をささげても、神様が生かしてくださいならなければ一日も生きられないことに気づきました。生かされている一日

は、このうえもなく尊いのです。

限られたいのちなら、聖書を学び、神様のことをもつとよく知りたいと願いました。ちようどその折、お茶の水聖書学院で通信講座があることを知りました。さつそく申し込み、DVDで授業を受け、サマースクーリングにも参加しました。

最初は聴講生として好きな科目をゆつくり学んでいました。そのうちもつと学びたくなつて本科生に編入させていただきました。旧約聖書は難しく、読んでいても意味のわからない箇所だらけですが、学んでいくうちに書かれている事柄の背後にある神様の愛に気づかされ、胸が熱くなりました。

聖書学院で学んだことは、神様がこの私をどれだけ愛しておられるかということでした。卒業まで七年かかりましたが、ちようど卒業の年が乳がん手術一〇年目でした。

振り返ると、人生の中で起きるすべてのことが、神のご計画の中でありました。その神は善意のお方であり、いつも共にいてくださいました。ひとりぼっちだったときも、死を願っていたときも、罪の中を歩んでいたときも、教会を離れてしまったときも、病気で苦しんでいたときも、ずつと一緒だったのです。

インマヌエルの神に感謝します。インマヌエルとは、キリストの別名でもあり、「神が我々と共におられる」という意味です。

愛唱聖句

*第二コリント十章一三節

あなたがたの会った試練はみな人の知らないようなものではありません。神は真実な方ですから、あなたがたを、耐えられないほどの試練に会わせることはなさいません。むしろ耐えられるように、試練とともに脱出の道を備えてくださいます。

*詩篇一九篇七節

苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。

私はそれであなたのおきてを学びました。

*ハバクク二章三節

もしおそくなっても、それを待て。それは必ず来る。遅れることはない。

愛唱賛美歌

*聖歌三三二番 主はいのちをあたえませり

*聖歌五二〇番 しずけき川のきしべを